

文系学生における研究組織運営と情報処理学会発表 エントリー効果に関する一考察

鳥谷部 歩[†] 佐藤 雄哉[‡] 平澤 翔太³ 皆月 昭則⁴

釧路公立大学^{†3} 釧路公立大学情報センター⁴

1.はじめに

学会で研究発表をする学生の多くはゼミナール (以下, ゼミ) に所属している. 一般的なゼミでは, 担当教官の指導のもとゼミ生が専攻科目について研究・討論を行う. 学会への研究発表を行うゼミでは, 教官から提供される知識を参考に自己研究やゼミ一同による共同研究を完成させ, その研究を学会で発表する. これらのゼミは研究組織として運営されている. 研究組織とは, 組織目標を持ち, その目標を達成するための機能が集合した組織である. 研究組織におけるゼミの機能には, 組織構成員との討論や教官との論議などで, 状況に応じて新たな機能も付加されることもある.

本研究では, 学会への研究発表を行うゼミに所属する文系学生を対象に, 情報処理学会創立 50 周年記念大会での研究発表を組織目標とすることで, 学会発表までの研究プロセス, 研究組織としての運営プロセスにどのような影響を与えるのかを質的データを取得し, 分析することで考察をした. 質的データを取る手法として, 参与観察・アンケート調査・インタビューを採用した.

2.学会発表までの研究プロセス

学会発表までの研究プロセスとして以下のような手順が考えられる (fig1).

- ①発想・創造
- ②研究方針決め
- ③研究進行 (検証やシステム構築等)
- ④完成

2.1 ゼミの研究組織としての運営プロセス

本ゼミでは, 研究プロセスを確認するために, 自主ゼミを実施した. 自主ゼミの主目的は「研究の欠点の指摘」と「学会提出に対する評価基準の設定」であった. しかし, ゼミ全体でこの目的への認識が違ったため, 組織運営形態の修正が行われた. 自主ゼミの運営形態に対する意見として, 「欠点の指摘だけではなく, 欠点の改善案の提供をすべき」, 「自主ゼミでの評価基準が厳しく, 発想に制限がかかる」というものがあつた. そのため修正案として fig2 に示す

ような完成論文を査読し, 修正や改善を行う方針に運営プロセスを修正した.

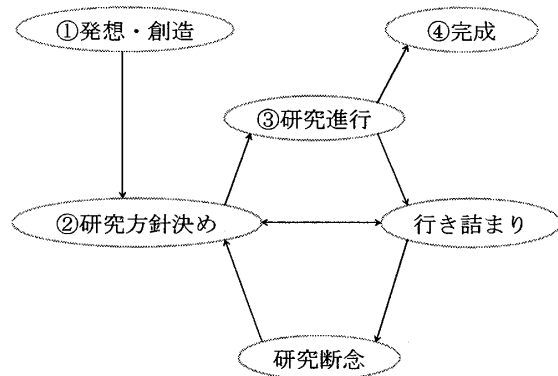


fig1. 研究プロセスのフローチャート

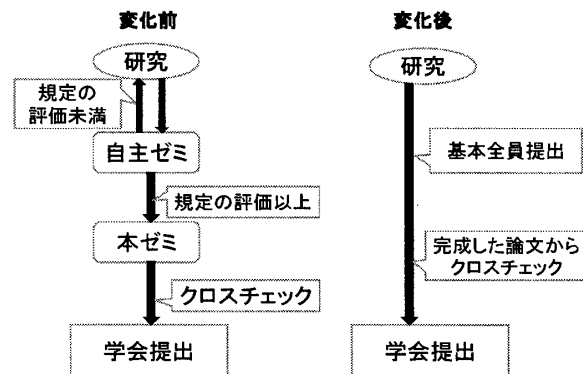


fig2. ゼミ運営プロセスのフローチャート

3.参与観察による調査

参与観察では, 研究組織としてのゼミ運営や自己研究に励むゼミ生の研究プロセスへの参与, 現状の研究段階についてゼミ生と対話することで調査を行った.

3.1 アンケート調査

研究及びゼミに関するアンケートを作成し, ゼミ生の研究・ゼミに対する心境や意識について調査を行った.

研究に関するアンケートでは, 各ゼミ生の研究を行うプロセスを調査した. 調査項目として,

- ・研究に費やす学習時間
- ・研究に必要な情報を得る手段

A consideration about study organization management and the Information Processing Society announcement entry effect in the humanities course student.

Ayumu Toriyabe[†] Yuya Sato[‡]

Kushiro Public University^{†‡}

Kushiro Public University Information Center⁴

- ・他の研究に参加・参画しているか
 - ・学会(全国大会)を意識し研究しているか
- などの質問を設定した。

ゼミに関するアンケートでは、各ゼミ生のゼミ運営に対する思いやゼミの機能性について調査した。調査項目として、

- ・あなたにとってゼミとは
- ・ゼミが研究組織として運営されているか
- ・ゼミの機能を有効に使っているか

などの質問を設定した。

3.2 インタビューによる調査

参与観察、アンケートでの調査を行ったが、さらに信頼性のある質的データを取得するために、インタビューを実施した。インタビューは一对一で直接意見を聞く形式で行い、ゼミ生共通の質問とアンケートで得た結果を参考に各ゼミ生に合わせた質問の二種類でインタビューを実施した。

4. 調査結果と分析

今回開催される創立 50 周年記念全国大会は通常の全国大会とは違うため、ゼミ生全員からより意義のある研究にしようとする意識が高く、研究やゼミ運営に影響を与えるということが調査によって明らかになった。その意識が特に顕著となって表れていたのは自主ゼミ時である。

fig3 はゼミ生の研究時間と自主ゼミ通過者が示してある。各ゼミ生の平均的な一日における研究時間は約 5 時間で、研究時間が平均よりも低いものは自主ゼミで規定の評価に届きにくく、高いものは規定の評価を越え、自主ゼミを通過する傾向が見られる。

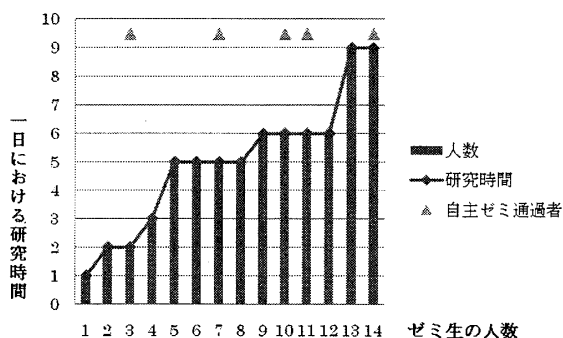


fig3.ゼミ生の研究時間・自主ゼミ通過者

このような結果が出た要因としては、前述のゼミ生間での自主ゼミ運営方針における認識の違いであると考えられる。自主ゼミへの認識の違いとして、「全国大会に相応しい研究を自主ゼミに出すべきという認識」と「欠点の改善を自主ゼミで行うという認識」に大別される。前者、後者共に認識を支持しているゼミ生の割合

は半々だが、後者を認識していたゼミ生による自主ゼミでの評価は比較的厳しく付けられたため、自主ゼミの通過者が少なくなる事が明らかになった。

また、研究組織としてのゼミの機能を有効に使っていないゼミ生が少数いる事も要因の一つである。序説の通り、研究組織としてのゼミの機能とは、ゼミ生間での討論や教官との論議、自主ゼミの運営も目標を達成するために作られた機能である。完成度の高い研究にするためにもゼミ生との討論と教官との論議を活用するのが理想である。しかし現状では、この二つの機能を活用するゼミ生は全体の半数以下で、ほとんどがゼミ生との討論しか活用していなかったことがアンケートとインタビュー調査により明らかになった。

調査結果をまとめると、全国大会を組織目標とすることで、各ゼミ生から完成度の高い研究が提出された。そのため、研究プロセスはその場に相応しい研究にしようという意識により、完成度の高い研究にするためのアプローチの仕方が、大きく変化したと考えられる。しかし、ゼミ運営において、自主ゼミでは、自主ゼミの時間的拘束が長い割にそれに見合ったパフォーマンスが発揮されておらず、研究組織としての機能面においても、組織目標を達成するための機能が十分に活用されなかった。ゼミ生との討論も研究をする上で重要な機能でもあると考えられるが、より完成度の高い研究に仕上げるには教官との論議が一番重要な機能であるということが、各ゼミ生の研究プロセス・研究内容を調査した結果から言える。そのため、今回の全国大会に向けたゼミ運営は、研究組織として完全に運営されていないという事が言える。

5. おわりに

認識の違いや捉え方により研究プロセスやゼミ運営プロセスに費やす時間に無駄なロスが多々あった。時間は資源として最も万能で貴重であるため、その消費に見合った効果が出せない損失は大きい。

研究をするためには研究組織としてのゼミの機能は必要不可欠である。しかし、機能の意図の認識次第によっては、その機能の効果はプラスにもマイナスにもなる。今後もゼミが研究組織として運営するのであれば、ゼミ全体で研究組織における機能の意図について、ゼミ生同士で認識を統一しなければならない。でなければ、また今回の様な認識の相違が多発したゼミ運営状態に陥ることが考えられる。